

# 正史魯肅 vs 演義魯肅

190825 佐藤ひろお

## 1. はじめに

吉川英治・横山光輝をはじめとした『三国演義』に淵源をもつ作品で三国志に触れ、興味をもって関連書籍を読み進めると、**歴史書に記された魯肅は、『三国演義』が描くキャラクターと異なる**ということを知る。

単純化すれば、「演義魯肅はお人好しで無能に見えるが、正史魯肅は決断力に富んで有能である」という発見を経験する<sup>[1]</sup>。

しかし、**テーマ**（書物の性格、著者・編者が表現したいこと）や、**ストーリー**（なかで起きる出来事）から、完全に自由で独立したキャラクターというものは、存在し得ない。魯肅のキャラクターも、それぞれの書物のテーマやストーリーの影響下にある。内部で整合性を保ち、一定の役割を負っているはずである。キャラクターだけを書物から切り離し、優劣や特色だけを比べても、ほとんど意味をなさない。テーマ・ストーリーと関連づけて分析する必要がある。

**正史魯肅のキャラクターは、『三国演義』の作中世界のなかで存在できない**。その逆も同様である。

正史『三国志』と文学『三国演義』のテーマ・ストーリーの違いに着目しながら、正史魯肅は、いかにして演義魯肅と変成したかを検討してゆく。

	テーマ	ストーリー
史書『三国志』	魏晋の成り立ちを示す	原則、過去の事実を記す
『三国演義』	蜀の劉備の正しさを示す	テーマに準じ、 <b>事実を改編可</b>

[1] 近年は、作品の増加、正史への関心の高まり、『三国演義』の失墜、キャラクターの再解釈が積極的に行われており、受容形態は多様化していると思われる。

## 2. 建安十三年 赤壁の勝利

〔正史〕

- ・劉備・孫権が、赤壁で曹操を破り、曹操は北に撤退
- ・劉備・周瑜が、南郡（江陵）で曹仁を囲む、孫権が合肥を囲む（呉主伝）

〔演義〕 第五十一回後半

- ・劉備が油江口に駐屯し、江陵を窺う \* 正史では建安十四年～十五年の駐屯地
- ・孔明・魯肅が「周瑜が江陵攻略に失敗したら、次に劉備が攻める」と約束
- ・魯肅が劉備集団と約束する（が弄ばれる）というモチーフの反復開始
- ・孫権が合肥を囲む

## 3. 建安十四年(1) 江陵の帰属

〔正史〕

- ・春、孫権が合肥から撤退
- ・周瑜・曹仁が「歳餘」殺傷しあい、曹仁が江陵放棄、**周瑜が南郡太守**（呉主伝）
- ・劉備が、**荊州南部四郡**の太守を降服させる（先主伝）
- ・劉備が南部を攻め、同時に周瑜が江陵を攻める協同作戦か
- ・劉備が上表して劉琦を荊州刺史に；同年、**劉琦が死に**、劉備が荊州牧に

〔演義〕 五十一回末～五十二回

- ・**周瑜が曹仁を追撃する間、孔明が江陵詐取** \* 約束違反、周瑜の怒①
- ・魯肅「孫権が合肥で釘付け、劉備と争うな」 \* 架空の苦戦が周瑜の足かせ
- ・魯肅が孔明に「孫権は劉備を救った、江陵を返せ」 \* 単刀赴会（6年後）繰上げ
- ・孔明が魯肅に「劉備は劉表の弟、荊州の支配権あり。**劉琦の死後に返還**」と約束
- ・魯肅「劉備と曹操が同盟したら困る。劉備を刺激するな」
- ・孫権が合肥で釘付けなので周瑜は、江陵を攻められず \* 史実への回帰を妨害
- ・劉備が馬良を従え、劉琦を荊州刺史に \* 時期は正史なみ、馬良は演出
- ・**荊州南部四郡**を平定 \* 周瑜の**江陵攻略より後**に移す（描写順序の都合か）

〔演義〕 五十三回

- ・孫権が合肥で張遼に大敗 \* **演義独自**、史実への回帰を妨害

〔演義〕五十四回

- ・ **劉琦が死に、魯肅が荊州を弔問** \* 正史では劉表のときだけ（1年前）  
孔明「劉備は劉表の弟、赤壁の功労者は借刀風の私、劉備こそ荊州牧」 \* 約束違反
- 孔明「益州を得たら荊州を返還」と約束 \* 正史では6年後、涼州に言及
- \* **魯肅が交渉のニーズを有し、かつ交渉が低調なのは、江陵を武力で奪われたから**

## 4. 建安十四年(2) 劉備が孫権を訪問

〔正史〕

- ・ 荊州牧劉備が孫権妹と婚姻、**土地が足りないため孫権に依頼**にゆく
- \* **劉備が交渉に挑むニーズを有する**のは、江陵を周瑜が支配しているから

〔演義〕五十四回・五十五回

- ・ 周瑜は魯肅に恩があり（穀倉）、孫権の怒りから救うため、**美人計**で劉備を招く
- \* 演義劉備は、**自分から交渉に挑むニーズがない** → 周瑜の拙い計を付加

孔明が三たび周公瑾をいからす 背景画像 (c) コーエーテクモゲームス

1) 江陵・襄陽をだまし取る  
2) **劉備が南徐（丹徒京城）から脱出**  
3) ??

↓

『三國演義』五十四回・五十五回

フィクション同士が相打ち（正史との不整合を回避）  
周瑜の計略は、看破される「ために」実行される

正史周瑜伝（周瑜が江陵を領す）	周瑜が劉備に危害を加える フィクションの3つの計略	孔明が趙雲に授けた <b>3つの鏑のふくろ</b>
① 劉備が領土交渉に乗り込む 孫夫人が劉備と政略結婚	孫夫人との <b>結婚を期待させ</b> 劉備をおびき寄せて抑留	呉国太・喬国老が 結婚を支持して現実化
② 周瑜が <b>美女を用いて</b> 劉備を抑留 関張と引き離す（孫権が却下）	孫権・張昭が計略を支持 <b>諸葛亮との離間</b> も提案	曹操の荊州攻撃を偽り、 劉備は揚州を離脱
③ なし	周瑜が呉將を動員し 劉備を追撃	<b>孫夫人が追撃を妨害</b> 関羽軍らに周瑜軍が敗れる

- ・ 周瑜が、孔明のせいで劉備を取り逃がし、周瑜の怒② \* 作中は建安十五年正月

〔正史〕

- ・ 備が権を表して行車騎將軍・領徐州牧、備が荊州牧（曹操を排除した互薦）

〔演義〕五十六回上

- ・ 権が曹操に備の荊州牧を上表、**曹操が周瑜を南郡太守に** \* 周瑜の官職が正史なみ

『三国演義』 建安十五年

孫権：曹操に「孫権と劉備の対立」を知られたくない

→ 曹操が劉備と結託し、孫権を攻撃？

劉備から警戒されたくない

→ 劉備が曹操に投じ、孫権を攻撃？

曹操に向けて、劉備を荊州牧に推薦

→ 曹操からの攻撃を防ぎ、劉備に恩を売れる



曹操：周瑜を南郡太守とする → 劉備と孫権の対立をあおる

- ・ 劉備が江陵を得ており対等に近い外交闘争 \* 正史劉備は領土が足りず最弱

『三国演義』 第56回上 孫権が曹操に上表し、劉備を荊州牧に



## 5. 建安十五年

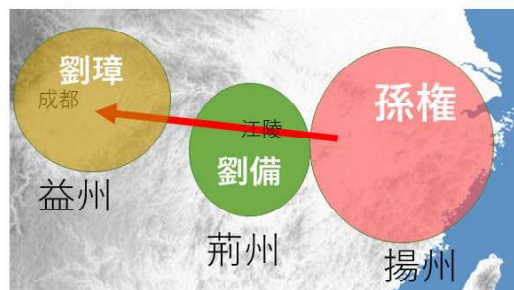
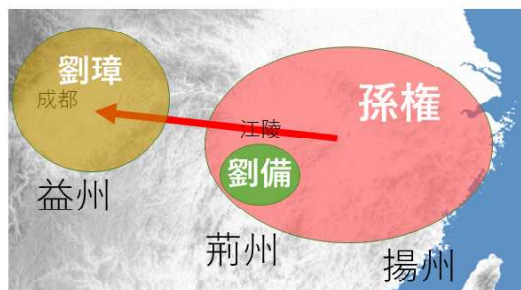
〔正史〕

- ・ 孫権が協同の蜀取りを提案、劉備の主簿殷觀が反対、孫権が中止（先主伝）
- 劉備「孫権が蜀を取るなら、髪を振り乱して山に入る」（同注引『献帝春秋』）

## 建安十五年、周瑜最晩年の劉璋征服計画

『三国志』先主伝

『三国演义』第56回下



賛成：劉備自ら益州を支配可

反対：孫權の勝敗に拘わらず窮する

孔明の支持で劉備が泣く「劉璋は弟」

ひとのよい魯肅は信じ、周瑜が怒る

白地図：むじん書院「三国志地図」 <http://www.project-imagine.org/mujins/maps.html>

〔正史〕

- ・周瑜が死に、**後任魯肅が、劉備に江陵を貸す** \* 正史魯肅の最大の事業
- ・漢昌郡を設置、魯肅を太守として陸口に屯せしむ（呉主伝）

〔演義〕

- ・周瑜は、蜀攻めを装って**江陵を狙い**、孔明に見抜かれて憤死 \* 周瑜の怒③
- \* すでに劉備が江陵を支配、演義魯肅は役割・出番なし

## 6. 建安二十年

〔正史〕

- ・劉備が前年に益州を獲得したため、**諸葛瑾を使者**とする（呉主伝）
- ・劉備が「**涼州を得たら、荊州を返還する**」と逃げ口上（先主伝・呉主伝）
- \* 他の領土を得たら返すという口上は、正史では初めて

〔演義〕六十六回

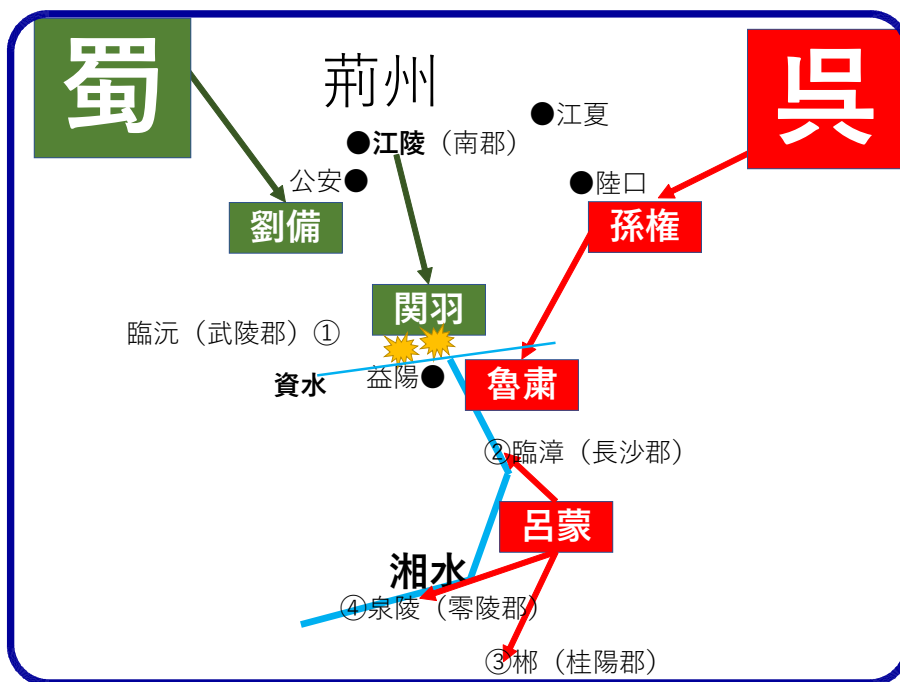
- ・張昭「劉備に『益州を得たら荊州返還』を守らせるため、**諸葛瑾の家族を捕縛**」
- \* 演義独自の約束履行を催促／章回小説の素材
- 「期待に胸を膨らませて急いで次回を見てみると、なんとも馬鹿げた計略<sup>[1]</sup>」

[1]金文京『三国志演義の世界』増補版、東方書店 2010 年、42p

- ・孔明は見透かし、劉備に耳打ちした後、劉備に泣きついて返還をねだる（演技）
  - \* 訪問当初から瑾の手の内は見透かされて、相互に茶番劇
- 劉備が**三郡の返還に合意**（演技だが、諸葛瑾への約束には違いない）
  - \* この三郡は、正史で呂蒙が攻略する地域、演義中では必然性なし
- ・孔明「関羽の合意を得るべき」、劉備「関羽は短気で制御不能」と留保
  - 関羽は独断で劉備の判断を破棄
  - \* 孔明から関羽に連絡なし、関羽は孔明の「騙されたふり」に騙されかける？

〔正史〕

- ・呂蒙が三郡攻略、益陽北で両軍が対峙（呉主伝・関羽伝・呂蒙伝・甘寧伝）
  - 誰かが「土地は、徳のあるところに帰する」と言った。魯肅は声を励ましてこれを叱咤し、言葉も顔つきもきわめて厳しかった。（魯肅伝）
  - \* 魯肅伝にセリフがないため印象が薄い



〔演義〕 六十六回

- ・諸葛瑾の計略失敗を受け、**魯肅が関羽を陸口に招く** \* 呂蒙軍の動きは抹消
- ・発言者を周倉に；魯肅が叱咤した事実を抹消、関羽の叱咤のみを残す

- ・義絶関羽が不義の片棒を担ぎ、魯肅に「失信」「貪而背義」を咎められる
  - \* 魯肅伝注引『呉書』（韋昭が呉を正統として著す）に取材した影響
  - \* 李卓吾本は、嘉靖本にない「いくつかの郡も大漢の疆域」を追加、圈点を付す  
編者曰く、関羽は聖人の言；領有権争奪を論ずること自体が誤りと正当化<sup>[1]</sup>

## 7. おわりに

正史魯肅と演義魯肅の分岐点は、建安十四年、周瑜が曹仁を江陵から駆逐した後、**孔明が江陵を横取りしたところ**にある。演義周瑜は一度も江陵に入れず、無意味に三度も怒らされ（みたび周公瑾をいか気らす）寿命を消耗した。

正史魯肅の最大の事業は、南郡太守周瑜（治所は江陵）の死後、**江陵を劉備に貸し与えたことである**。しかし演義世界で江陵は、魯肅が貸与するまでもなく、孔明が武力で奪った。これでは、**魯肅の仕事がなくなってしまう**。結果、演義魯肅は何をなすでもなく、孫権と劉備のあいだを右往左往するほかなくなった<sup>[2]</sup>。

正史の単刀赴会は、魯肅が江陵を貸したという経緯があり、魯肅に有利な状況で行われた。だが演義では、貸与の事実がない。魯肅が強気に出られる根拠に欠き、**関羽の破綻した論理にも強行突破された**。演義単刀赴会は、作中で繰り返されてきた、冴えない（劉備側が優位な）会見のうちの一回として溶け込み、意義が薄められた<sup>[3]</sup>。

演義は、劉備・関羽の義を持ち上げるため（テーマ）、**孔明が周瑜を出し抜いて江陵を得たこと**（ストーリー）を加えた結果、演義魯肅は正史に見せる役割も交渉力も失い、無能なお人好し（キャラクター）に造型されざるを得なかったのである。[了]

---

[1] 渡邊義浩『関羽\_神になった「三国志」の英雄』（筑摩選書、2011年）、第四章

[2] ストーリーを前進させる役割を持たぬキャラクターは、創作のセオリーに照らせば、登場不要である。『三国演義』において、特段の役割がない魯肅が登場すること自体が、正史の名残であり、史実が参照された痕跡と位置づけてもよいかも知れない。

[3] 「劉備側と会見する魯肅」というモチーフは、正史単刀赴会からイメージを得たものであろうが、演義で孔明が江陵を横取りして以降、つねに孔明優位で反復され、魯肅が交渉することのインパクトが矮小化されてきた。演義編者は、**正史関羽の不義を救済するため、周瑜の功績を孔明に奪わせ、江陵貸与の史実自体を抹消し、一貫して魯肅の交渉力を奪うことに注力した**、と指摘したら言い過ぎであろうか。